

2020 年 2 月

青 山 学 院 大 学
地球社会共生学部長 升本 潔

地球社会共生学部 合格者の皆様へ

この度は、青山学院大学地球社会共生学部への合格、誠におめでとうございます。

ご入学に先立ちまして、下記の書類及びご案内をよくお読みになった上で、新しい大学生活の準備を進めてください。

大学入学までの期間が有意義なものとなるよう過ごしていただき、元気に入学され、お会いできることを楽しみにしています。

記

1. 青山学院大学地球社会共生学部 2020 年度推薦図書一覧
2. 地球社会共生学部・英語事前学習についてのご案内

以上

【本件に関する問合せ先】

〒252-5258 神奈川県相模原市中央区淵野辺 5-10-1

青山学院大学 相模原事務部学務課
地球社会共生学部担当

TEL:042-759-6050

青山学院大学地球社会共生学部 2020 年度推薦図書一覧

地球社会共生学部の教員が新入生の皆さんにお勧めする図書です。入学するまでに、ぜひ一冊でも多く読んでみてください。

『移民の経済学』

ベンジャミン・パウエル/著、藪下史郎/監訳、東洋経済新報

現在、日本は少子高齢化時代にあるが、労働力の不足は深刻な社会問題になっている。短期的には、オリンピック開催に向けたインフラ整備に関わる人手不足があるが、長期的には恒常的な人口減少の中で絶対的な人手不足を如何にして解決するかという問題がある。識者の中には、日本国民の人口が減少して経済規模が縮小するので、敢えて近隣の国々から労働者を受け入れる必要はないのではないとする意見や、全体の人口は縮小しても高齢者人口の絶対的な増大に対して介護者を増やさねばならない、などの様々な意見がある。本著は、それらを世界的な過去の事例やモデルを紹介しつつ体系的に整理されている。日本の少子高齢化時代の問題を考える上で、本書は必読に値する。

一岩田伸人（国際貿易）

『海の帝国——アジアをどう考えるか』

白石隆/著、中公新書

21 世紀の世界経済を牽引していくと言われるようになった「アジア」。しかし「アジアとはなにか」という問いへの答えは、実は簡単ではありません。いくつもの海によって隔てられ、多様な気候、異なる宗教、違った政治体制が混在するこの地域をどう考えるか。この本では、シンガポール、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンなどを比較史的に考察し、交易ネットワークで結ばれた「海のアジア」を描き出していきます。日本とアジアの関係を歴史的に遡り、あらためて考えたい方に。

一高橋良輔（政治理論・国際関係思想）

『革命家、チャンドラー・ボース』

稲垣武/著、光人社 NF 文庫

本著は、第二次世界大戦においてインドの革命家チャンドラー・ボースが、日本の支援の下で祖国インドの独立に賭けた執念と生き様を、リアルに描いた良書である。当時もインドは英国の直轄植民地であったが、ボースはインドの独立には、ガンジーのようなやり方ではなく、時には武力を持って英国軍と戦わねばならないとして、インド独立のために日本の支援が必要であると強く訴え、日本も様々な思惑のありながら結果的に、ボースを最後まで支援し、その遺骨は今

も日本(東京、杉並区)にある。ボースの生まれ故郷であるバングラデシュの国民は、今なお、ボースを英雄として尊敬し続けており、遺骨が安置されている日本のお寺には、常にバングラデシュの人々が訪れるいわば聖地となっている。日本は、過去のある時期にボースという革命家の志に感銘を受けて共にインド独立のために戦ったことは事実であり、バングラデシュとインドの人々が今でも「日本」という国へ何らかの信頼と期待を心底に抱いているのではないかと考えさせられる良書である。

—岩田伸人（国際貿易）

『学校って何だろう ―教育の社会学入門―』

荻谷剛彦/著、ちくま文庫

「どうして勉強しなければいけないの?」「なぜ毎日学校へ通わなければいけないの?」「校則はなぜあるの?」「教科書ってほんとに必要なの?」皆さんは、このような疑問を感じたことがありますか。また、こうした疑問について、立ち止まってじっくりと考えたことはありますか。

本書は、「毎日中学生新聞」に1997年から98年にかけて連載された荻谷氏の文章をまとめたものです。章題には、皆さんが一度は抱いたことがあるであろう、冒頭に挙げたような学校や勉強についての疑問が並んでいます。この一冊を手がかりに、ぜひそれらの「常識」を問い直してみてください。当たり前のことを、一度足を止めてなぜだろうと考えることは、「学ぶことの意味」をふたたび掴みとる助けとなるはずです。

—橋本彩花（比較教育学）

『危機の二十年―理想と現実』

E.H.カー/著、岩波書店（2011年新訳版）

本書は、国際関係論（国際政治学）の創成期において最も大きな影響を及ぼした古典のひとつとされ、多くの学者にとって国際関係論の出発点そのものを意味する。英国で出発された初版から80年経った現在でも、国際関係論の入門書として紹介されることが多い。著者は、イギリスの外交官として活躍したのち、ジャーナリストなどを経て学者に転身し、外交史を中心に歴史学の研究で大きな注目を集めた。本書の当初の目的は、第一次世界大戦後のヨーロッパの世論に、なぜこの大戦が勃発したかということを説明したうえで、平和と安定が持続する国際秩序を形成するために必要な知的貢献を提供するものであった。皮肉にも本書の準備中に、ヨーロッパ各国の政治家や知識人の予想に反して、第二次世界大戦が勃発したが、これによって本書で示される概念などが国際関係の分析に一定の有効性をもつと学問的に認識された。本書の根幹は21世紀の問題を考えるうえでも大きな示唆を与える。

—幸地茂（国際関係論・ラテンアメリカの地域研究）

『グローバルゼーションとは何か』

伊豫谷登士翁/著、平凡社新書

グローバルゼーションという言葉が使用されるようになってから、長い年月が経過しました。現代社会ではごく当たり前の状況ともなり、現代社会の様々な事象がこのグローバルゼーション状況を前提としています。本書は、現代社会を理解するために必要なこの「グローバルゼーション」という現象を、政治経済分野を中心として、多角的に読み解いています。特に、グローバルゼーションには、差異化と統合という両面性があり、グローバルとナショナルは補完的であるという指摘は非常に重要です。

— 齋藤大輔（東南アジア研究・文化人類学・文化社会学）

『経度への挑戦』

デーヴァ・ソベル/著、藤井留美/訳、角川文庫

現代は、GPSをはじめとした測位衛星により、屋外ならどこでも緯度・経度が数 m 程度の誤差で分かるようになっていました。しかし、大航海時代真ただ中の 18 世紀初頭でも、航海中に船のいる場所の経度を知ることは困難を極め、船が位置を間違えて座礁し、一晩で 2,000 人とも言われる人たちが命を落とすこともありました。この問題を重視した大英帝国は、多額の懸賞金を出して、経度の計測法を公募しました。本書は、並み居る科学者たちが四苦八苦する中で、英国の田舎の時計職人 John Harrison が、権威ある科学者たちによる差別や偏見に会いながらも、航海中でも狂わない精巧な時計を忍耐強く開発していくという実話を描いたものです。彼の時計により、大英帝国は高度な航海術を手に入れ、海洋の覇権を握っていくことになります。閉塞感のある社会では、既存の枠組みや固定観念を突き破り、次の一步を切り開く人材が必要です。この本を読んで、未来の Breakthrough を成し遂げてください。

— 村上広史（地理空間情報科学）

『言語と社会』

P. トラッドギル/著、土田滋/訳、岩波新書

同じ国の「ことば」でも、地域ごとに使い方や発音などが異なります。方言の存在を知っているみなさんは言わずもがなでしょう。しかしそれだけではなく、インターネット上と、顔を見合わせながらのコミュニケーションでは、印象が違ふと感じた経験はありませんか。映画や音楽に登場する英語は学校で学ぶ英語と隔たりがある、あるいは洋画の日本語字幕とせりふの英語は必ずしも同じではないがそれはどうしてだろう、と考えたこともあったかもしれません。この本は今から約半世紀前にイギリスの大学で言語学を教えていたトラッドギル教授が、社会や文化の関係から言語が変化する、また逆に言語が社会や文化に影響を与えることに着目しその現象を紐解いたものです。社会階級、民族、性、場面、国家、地理とそれぞれの観点から、言語の変

化がどのように起こるのかを初心者にもわかりやすく解説してくれています。大学の研究も垣間見ることもできる秀逸の一冊です。

—菊池尚代（言語学・教育学・メディア）

『国際政治とは何か——地球社会における人間と秩序』

中西寛/著、中公新書

各国で自国第一主義が叫ばれ、ポスト・グローバル化段階に入ったともいわれる現代世界。そのなかで、わたしたちは国際政治をどのようにとらえるべきなのでしょう。著者は、地球社会における国際政治を「主権国家体制」、「国際共同体」、「世界市民主義」という三つの考え方の相克として描きます。インターネットがもたらした「仮想の地球社会」は安全保障、政治経済、価値意識にどのような影響を与えつつあるのか。日々の事件やニュースに振り回されずに、自分自身の視点を持ちたい方におススメできる入門書です。

—高橋良輔（政治理論・国際関係思想）

『白井博士の未来のゲームデザイン -エンターテインメントシステムの科学-』

白井暁彦/著、ワークスコーポレーション

本書はゲームクリエイターを目指す人を読者として想定し書かれていますが、そうでない人も楽しめる一冊です。ゲームを作る側や日頃からゲームをする人でなくても、私達はゲームをはじめとするエンターテインメントコンテンツに日々触れています。それには面白いと感じさせる仕組みや、もう一度見たいと思わせる仕掛け、ユーザをもてなすデザインなど、様々な工夫が施されています。このようなエンターテインメントのシステムは、ゲームだけでなく、未来を見据えたものづくりやサービスを創造し提供する場合にも繋がってきます。エンターテインメントという要素は、なくても生きていけるものですが、人を幸せに出来るものです。人々を幸せにし、社会的な価値を生み出すものを作るにはどうすればよいか。その考え方のヒントをきっと得られるはずです。

—高田百合奈（情報デザイン）

『深夜特急』

沢木耕太郎/著、新潮文庫

学生時代に私が東南アジアを放浪するきっかけとなった、いわゆるバックパッカーのバイブルとして語り継がれる偉大なる名著です。「インドのデリーからイギリスのロンドンまで乗り合いバスで行く。」主人公はなぜこの様な旅を行おうと思ったのか。道中で何が起こったのか。そして見事ゴールできたのか。読んでからの楽しみです。特に東アジア地域を旅する第1巻及び

第2巻がオススメです。ただし、一度読み出すと（主人公と一緒に2万キロの旅へ出発すると）止まりませんので、そこだけが要注意です。

—林拓也（経済史・経営史）

『世界を救う7人の日本人－国際貢献の教科書』

池上彰/著、朝日新聞出版

本書は、水、母子保健、食料生産、基礎教育、産業振興等の分野で世界で活躍するプロフェッショナル8名の言葉を通して、途上国における援助の実際、日本の援助のアプローチを教えてくれる。一般に援助について尋ねると、相手国の人に資金を渡すだけではだめ、あるいは、施設や設備の供与のみならず、技術や知識を教えるべきなどの感想をもらうことがある。援助の現場ではこれらが当然のことになって久しい。むしろ、プロの現場では、途上国の人々が自分たちが整備した自分たちの設備として当事者意識をもてるよう、地元の文化や社会のなかで根付く保健医療サービス、運営ノウハウになるよう、相手側に寄り添う現場主義に徹している。援助することは一方的な「貢献」ではない。日本国内でもますます求められる社会的起業、イノベーションのヒントがある。援助の向こう側にはこれからの世界経済を牽引しうる新たな市場がある。私たちが国際協力から学ぶものは多い。

—桑島京子（国際協力・社会開発論・東アジア）

『戦争の社会学——はじめての軍事・戦争入門』

橋爪大三郎/著、光文社新書

「平和を望むなら、戦いに備えよ」というラテン語の警句があります。しかし、わたしたちは、いったいどれくらい「戦争」について知っているのでしょうか。第二次世界大戦後の日本は、平和を強く望む一方で必ずしも戦争については直視してこなかったのかもしれない。街が破壊され人々が傷つく戦争が、どのように発展してきたのか、なぜ今もなくならないのか、本書は社会学の観点から分かりやすく解説してくれます。戦争を避けるためにも、戦争について知る必要があるのです。

—高橋良輔（政治理論・国際関係思想）

『正しく知る地球温暖化—誤った地球温暖化論に惑わされないために』

赤祖父俊一/著、誠文堂新光社

最近の「異常気象」により、地球温暖化に関する対策の必要性が叫ばれています。その中で、温暖化の原因が、人間が化石燃料を消費することによって排出される二酸化炭素だと断定した論調が主流になっています。本書は、現在進行している温暖化の大部分が人間による二酸化炭素の排出によるものではなく自然変動であるとして、二酸化炭素排出規制の流れを引き起こして

いる一部の「科学者」やそれに安易に同調している政治家やマスコミなどに正面から異議を唱えています。長年地球物理学の発展に大きな貢献をしてきた科学者である著者が、「学問の進歩にとって大切なことは議論すること」という姿勢を貫き、冷静に観測データと向き合い、世の中の常識や定説と言われることを鵜呑みにせず、真理を探究しようとする姿は、これからの不透明かつ多様化する社会を地球人として生き抜く若者たちに大いに参考になるでしょう。

—村上広史（地理空間情報科学）

『小さな地球の大きな世界：プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』

J. ロックストローム・M. クルム/著、武内和彦、石井菜穂子/監修、谷淳也、森秀行/訳、丸善出版

本書は2015年に出版されたBig World, Small Planet: Abundance Within Planetary Boundariesの翻訳です。昨今、さまざまなメディアでSDGsという言葉を目にする機会が多いと思います。SDGsとは2015年に国連で採択された持続可能な開発目標のことです。持続可能な開発の考え方を理解する上で、本書で提示されているプラネタリー・バウンダリー、つまり地球の限界という考え方はとても重要です。本書では、人間活動の急激な拡大が地球システムそのものを脅かしているということ、私たちが将来の世代にわたって成長と発展を続けていくためには、地球システムの機能を大切にする新しい発展の枠組みが必要となっていることなどが述べられています。少し理解が難しいかもしれませんが、本書の科学的データや美しい写真を眺めながら、将来の世界のあり方について考えてみてください。

—升本潔（国際協力・持続可能な開発）

『トランスナショナル・ジャパニーズ・ポピュラー文化がアジアをひらく』

岩渕功一/著、岩波現代文庫

文化の越境が日常化する中で、アジア域内においても、1990年代以降ポップカルチャーの存在感と相互浸透が顕著になってきました。本書は、このような状況をふまえた上で、1990年代以降のアジアで消費される日本のポピュラー文化と日本で消費されるアジアのポピュラー文化を多角的に検証しています。国境を超えた相互理解やつながりの構築など、ポップカルチャーの越境がもたらす多くの可能性がある一方で、「他者」としてのアジアの再生産や内向きのナショナリズムとの関係を論じている著者の指摘は、現在の日本で生じている状況に重なり合うものと言えるでしょう。

—齋藤大輔（東南アジア研究・文化人類学・文化社会学）

『なぜ豊かな国と貧しい国が生まれたのか』

ロバート・アレン/著、グローバル経済史研究会/訳、NTT 出版

本著は、欧米の先進国がグローバルに植民地を拡大しながら、分業を正当化しつつ、常に現地の国々を搾取して豊かな国になっている過程を、幾つかの事例を使って分かりやすく説明している。日本の事例もあがっているのだが、全体のボリュームから見れば僅かな紙面しか割いていないが、そのことで逆に日本はどうやって欧米先進国の搾取から逃れながら近代化ができたのだろうと思わせる。その意味でも、良書と言える。

一岩田伸人（国際貿易）

『反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体』

森本あんり/著、新潮社

近年「反知性主義」という言葉がしばしば用いられるようになっている。多くの場合、それは「知性」を欠く、または軽視するような主義・主張を指す言葉として用いられている。しかし、実はこれがアメリカの基督教の伝統の中で育まれた言葉であることをご存知だろうか。そしてこの言葉こそがなぜアメリカがトランプ大統領を生んだのかを理解する重要な鍵であることをご存知だろうか。著者の森本あんりは、アメリカに渡った基督教がその土壌の中で「反知性主義」という独自の価値観生み出すに至った過程を丹念に描き出している。本書を読めば、現代社会を理解するためには宗教的な知識が必須であることがよくわかるだろう。今のアメリカを知る上で好適な本である。

一小堀真（宗教社会学）

『＜文化＞を捉え直すーカルチュラル・セキュリティの発想』

渡辺靖/著、岩波新書

文化人類学者で現代アメリカ研究の第一人者である渡辺靖が、「ソフト・パワー」や「人間の安全保障」といった「非伝統的な安全保障」と「文化」の関係に焦点を当てて考察している。世界各地で生じているグローバリゼーション、パブリックディプロマシーなどに関わる多彩な具体的事例をとりあげながら、「文化」の捉え方と政策論という、別次元で論じられがちな課題を見事に華僑している。「文化」に対する深い理解と、フィールドワークで培った現実的で強靱でありながら柔軟な思考が根底に流れており、コンパクトかつ平易に書かれているけれども今日の文化理解に不可欠な観点が提示されている。

一岡本真佐子（文化人類学）

『平和主義とは何か』

松元雅和/著、中公新書

人類の歴史は戦いと共にある。21世紀は9.11のテロと共に始まった。そして排他的ナショナリズムは高まるばかりである。しかし地球社会において人々が共生していくためには平和的な関係が必要である。

日本は第二次世界大戦以降今日まで、平和主義を非常に重んじながら歩んできた。青山学院大学は日本を代表するキリスト教大学であるが、日本のキリスト教界は更に強く平和主義を主張している。しかし平和主義とは何なのか、またどのような種類の平和主義があるのかについてはよく理解できていないことが多い。

本書は、平和主義とは何か、また平和主義に対峙する正戦論と現実主義を広く類型化、検討し、わかりやすく整理している。平和主義も正戦論もキリスト教にそのルーツがあるのであるが、著者はそのこともよく押さえてかなりフェアな紹介をしている。平和的共存を考えるために一読を勧めたい。

—藤原淳賀（キリスト教社会倫理）

『ヴェニスの商人』

ウィリアム・シェイクスピア/著、新潮文庫、ちくま文庫他

市場メカニズムによる経済は、人々が近代的な考え方を持つようになって登場した。とりわけキリスト教における宗教改革の影響が大きいとされる。マックス・ヴェーバーによる論考（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）が有名だが、文学の世界からもそうした変化を知ることができる。ビジネスにも長けていた文豪シェイクスピアの作品には、それらがよく描かれている。次点としては『リア王』、『から騒ぎ』を推薦したい。

—山下隆之（理論経済学）

『マイルス・デイビス自叙伝(1),(2)』

マイルス・デイビス、クインシー・トループ/著、宝島社文庫

ジャズの帝王マイルス・デイビスが自らの人生を語った貴重な本です。私は中学生からプロのミュージシャンとして音楽の仕事を始めました。ずっと夢はマイルスとプレイする事で米国に留学した数年後に帝王マイルスはその生涯を閉じました。ジャズの、いや音楽の歴史の一つが幕をおろした瞬間でした。この本では音楽はもちろん、その破天荒な生き方、孤独、そして儂い愛と様々な出来事や心が生々しく語られています。私は彼の型にはまらない生き方から、多大な影響を受けました。ミュージシャンからシステムエンジニア、経営コンサルタント、そしてこの地球社会共生学部で教鞭を執っている自由な生き方はマイルスの奔放さからの影響です。今でも人生に迷った時、今の自分に自信がなくなったときに手にする大切な本です。原本の『MILES

The Autobiography』 MILES DAVIS WITH QUINCY TROUPE もマイルスの生の声を聞きたいときにオススメです。

—松永エリック・匡史（国際経営学・デジタルトランスフォーメーション）

『Linked: The New Science of Networks

（邦題：新ネットワーク思考—世界のしくみを読み解く）』

Albert-Laszlo Barabasi、Jennifer Frangos/著、青木薫/訳、Basic Books（NHK 出版）

現代社会においてインターネットのない生活は考えられないほど、インターネットは現代人の必須品となりました。しかし、皆さんはネット世界についてどれくらい知っていますか？

本書は、「べき法則（Power Law）」をもってネット世界を説明しています。「べき法則（Power Law）」とは、少数のウェブサイトが訪問者が偏る現象です。つまり、ネット世界は少数のウェブサイトに利用者が集中しています。例えば、Yahoo は毎日何百万人が利用していますが、一般人の個人ウェブサイトは特別な事件が発生しない限り、何十人しか訪ねてこれないです。更にこの現象はウェブサイトだけでなく、SNS（ソーシャル・メディア）でも起こっています。例えば Facebook で有名人は何万人の友達を持っていますが、一般人は多くても何百人に過ぎないです。本書では二人の著者がこのような現象が生じる理由（メカニズム）を緻密に説明しています。

ネット世界をより詳しく知りたい皆さんに、この本をお勧めします。皆さんも二人の著者と一緒に関心を持って探検してみませんか。

—申在烈（社会学・社会政策）

『The Prodigal God: Recovering the heart of the Christian faith』

Timothy Keller/著、Hodder & Stoughton

本書には、『放蕩する神』という訳本がありますが、絶版で購入できないため、原本（英語）を読むことをお勧めします。Kindle 版（150 ページ余）をスマホなどで読めば、難しい語彙があっても簡単に辞書を使えるので容易に読むことができます。

内容は、新約聖書のルカの福音書に記されたイエス・キリストによる「放蕩息子のたとえ」の解説です。「共生」を考えるうえで避けて通れない「人間の本性」に関して、極めて深い洞察が得られ、イエス・キリストの教えの深さに圧倒されること間違いなしです。また、人間の中に故郷を慕う強い思いがあるという指摘は、空間的思考についての理解を深める意味でも参考になります。

聖書は世界のベストセラーですので、地球人として必読の書ですが、今まで聖書を読んだことがない人も、この本を読むことで聖書を身近に感じられると思います。

—村上広史（地理空間情報科学）

地球社会共生学部・英語事前学習についてのご案内

地球社会共生学部では、IELTS という英語テストを複数回受験し（初回は1年次の6月を予定）、そのスコアをもとに留学が可能なレベルの英語力に達しているかを確認した上で、2年次後期に留学します。

以下に、英語力を向上させるために参考となる書籍等をご紹介します。日常的に使う英語はもちろんのこと、IELTS の対策としても大いに役立つことでしょう。入学前の今から英語力に磨きをかけた上で、まずは1年次前期に受験する IELTS で良いスコアが取れるように心がけてください。

【IELTS とは？】

☆IELTS (International English Language Testing System) は聞く、読む、書く、話すの4つの英語力を総合的に測る、世界各国で実施されているテストです。入学前にどのようなテスト形式なのかを知っておけば、必ずスコアアップにつながります。

下記に2つのオンライン学習サイトをご紹介します。どちらも無料で利用ができます。

1. 「Road to IELTS」 <http://www.roadtoielts.com/japan/>

方法：アクセス後、Choose your module の「Academic」を選択し、必要事項を記入後、登録「Register」をクリックして始めてみましょう。

特徴：30 時間分の講義を自分のペースで受講することができます。過去問題を利用して、実践的に練習ができます。

2. 「IELTS Official」 <https://www.youtube.com/user/IELTSOfficial>

方法：IELTS のオフィシャルホームページ <https://www.ielts.org/> にアクセス後、最下段に記載されている YouTube アイコンをクリックします。

特徴：IELTS のバンド(評価)に応じ、模擬解答例を紹介しています。特にスピーキングサンプルは参考になります。

➤ IELTS 受験の際にはパスポートが必要になります。入学前に取得できるように各自で準備をしておいてください。

(次頁に続きます。)

【手元に置いておきたい英語文法書】

☆高校で使用してきた文法書でも構いません。もし、購入するのであれば、以下のいずれかがお勧めです。

- ❖ 徹底例解 ロイヤル英文法（旺文社）
- ❖ エイザーの基本英文法・中級編＜上＞＜下＞（プレンティスホール出版編集部）
- ❖ エイザーのわかって使える英文法＜上＞＜下＞（桐原書店）
- ❖ マーフィーのケンブリッジ英文法（ケンブリッジ出版）

【本格的な IELTS 対策向け書籍】

☆入学後は本格的な IELTS 対策を行います。以下の書籍は実際のテスト問題サンプルや問題集です。

- ❖ 「Cambridge IELTS」 (Cambridge University Press)
(1 から 14 までありますが、難易度別ではありません。最新版は 14 になります。)
- ❖ 「新セルフスディ IELTS 完全攻略」 (ジャパントイムズ・日本語の解説付き)
- ❖ 「IELTS 対策模試 (日本語対訳版)」 Collins Practice Tests for IELTS (語研)
- ❖ 「IELTS ブリティッシュ・カウンシル公認 本番形式問題 3 回分」 (旺文社)
- ❖ 「IELTS ブリティッシュ・カウンシル公認問題集」 (旺文社)
- ❖ 「完全攻略! IELTS (「完全攻略!」シリーズ)」 (アルク)
- ❖ 「スコアに直結! IELTS」 (ナツメ社)

【挑戦してみたい英単語テキスト】

☆目標にすべきは 1 冊を終えることではなく、無理のない範囲で継続することです。高校時代に使用した英単語集があれば、まず学んだことを復習してみてください。さらに以下のテキストを利用すると、入学後の授業や IELTS 対策としても役に立ちます。

- ❖ Cambridge Vocabulary for IELTS with Answers and Audio CD
(Cambridge Exams Publishing)
- ❖ 実践 IELTS 英単語 3500 (旺文社・日本語)
- ❖ セルフスタディ IELTS 必須ボキャブラリー (ジャパントイムズ出版)
- ❖ IELTS 必須英単語 4400 (ベレ出版)